
苦恋-not sweet love-

Sorairo 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

苦恋 - not sweet love -

【コード】

N0360I

【作者名】

Sorairo 光

【あらすじ】

幼馴染に恋をした少女、でも思いの相手は少女の友達が好きで・・・
・・・ 苦い恋をした少女の物語。

甘いHappyEndをいつも私は望んでいた。

漫画の中のように甘い恋を試してみたかった。

私の恋はいつもLike止まりで、Loveなんていったことがなかった。

だからね？

あこがれたの。

甘い恋。

いつもHappyEndで終わるSweetLove。

ケーキみたいに甘くなくてもいいの。

ただ、ほんのりと甘ければそれがいい。

ほんの少しお砂糖を入れた紅茶のようにね……………？

でも恋つてLoveまでいくとやっぱり辛いね。

どこにもHappyEndなんてないじゃん！

いつも隣にいることが当たり前で男として見てこなかったあんたを、

何で私は今更喜欢きになったんだろう……………？

なんかもう、どうでもいいと思ってしまう。

幼なじみっていう壁が邪魔をする。

そして親友という女が幼なじみを奪っていく……………。

バツカじゃないの？

どす黒いものが私の中で渦を巻いて二人を心の中で毒づいている。

知ってるさ。あんたたちが両思いなこと、それを知らないのはあ

んたたちだけだったことも。

あまりにも気付かなくて笑っちゃうよ。ホント、滑稽ってね。

やっぱり私は主人公にはなれない。

真っ黒い人間。

汚れきった……………そんな人間。

最近じゃ汚れきって涙さえ忘れた。

親友だつてなんだつて関係ない。

私達が共有した時間はあんたには入ってこれない。

“親友だから自分が好きでも応援してあげる。”

そんなのただの偽善者よ。

現実の世界はそう簡単にはいくわけないじゃない。

「私ね……遠野君とののこと……好きなの。」

ふーん？

あっそ。

「ごめん、応援しない。私もトーノのこと好きだから。」

「そっか。」

それから何か月した？もう何年も経った？

長い月日かけた気がする。

「トーノが……好き……。」

一人、繰り返しつぶやいてみる。

口にするだけで……唇を噛み締めなくなるような……

・つらい言葉。

その私が好きな幼なじみのトーノは私の親友ののんちゃんが好きで、

私の親友ののんちゃんはトーノが好き。

自分の好きな人を親友がかつさらっていく。

よくあることよね。

漫画じゃ主人公が勝つけど。

そして両思いの二人は自分達が両思いなことを知らない。

これ以上滑稽なことってある？

胸の中で何度も何度も毒づく。

消えてしまえ。

何度も何度も考える。

同じことを繰り返す。

繰り返して生きてる。

私はそんな人間。

あ、あれ。ここどこだろ？

「優奈ほら？行くぞ？」

「えートーノ!？」

それ、タクシー……。

タクシーに乗り込むとメールが来た。

「宛名：トーノ 件名：うおー。やばい。本文：やばいんだけど！
今、ふたりつきり。向こうは女、こっちは男、後々押し倒しちゃっ
たりして……。(汗)」

「なにこれ……。」

「え！あ！ま、間違えた。」

「……ふーん、トーノでもそんなこと考えるんだ。」

ボタン！という音に苛まれ、私の声はトーノに届かなかった。

それに今、隣にいるのは私じゃんよ。

「え？」

「トーノでもそんなこと考えるんだ？」

トーノは何も言わなかった。

タクシーで流れていく知らぬ町並みを二人は別々の窓から眺めてい
た。

私はケータイを見た。

すると知らないスロットっぽいガラスに包まれた3cm弱のケータ
イストラップがついていた。

あれ……ああ、そうだ、これ、恋愛のなんかだ。

相手と相性がいいとスロットみたいなのが勝手にどんどんまわって
3ヶ月がそろったらそれはいい相性の相手。

どんだんスロットは回っていくけどまだ月は出る気配がない。

どこかの店の前におろされるとそこにはノンちゃんがいた。

私は純粹に何も思わず声をかけた。

私の心は潔白だった。

ノンちゃんとトーノと私で色んな店を回った。

最後にアクセサリーショップっぽいところに入っていった。

トーノは私に耳打ちした。

「なあ、俺好きな子いるんだよね。気付いてた？」

私はストラップを何となく目にした。

3つ三日月がそろっていた。

それでもなおスロットは回転し、三日月はどんどん肥えて丸くなっ
ていく。

私はトーノから思わせ振りの発言をいくつも受けていた。

「だろうね。好きな子、いるんじゃないかなって感じ。」
軽く笑う。

「えー、俺の気持ちもてあそんでるの？」

「もてあそんでないよ。」

するとトーノは私に腕輪を差し出した。

「ん！」

水色のビーズの腕輪と渋い赤茶みたいな腕輪。

水色の方がいいなって思ったけど、ノンちゃんを目で捕えて「一緒
にお揃いにしない？」と言った。

純粹にノンちゃんだけ寂しそうだったから。

ノンちゃんはすぐ手を振った。

「いいよいいよ！」

笑顔で。

「でも……」

迷惑じゃなければ……と言いつつ掛けたとき、トーノはムスッ
とした。

「言つとくけど、俺独占欲強いから。」

「独占欲強いのか？あははっ！何それ！」

トーノの腕に手を搔け、頭をくつつけた。

スロットはほぼ三つとも満月に近かった。

そして私は起きた。

ガバツ！

寝起きで髪の毛がバサバサに跳ねている。

「夢か……」

ああ、朝からいやな夢を見た。

こんな夢見たら……現実なんて見たくなくなっちゃうじゃない。

それにしても夢の中の私は潔白だった。

まるでノンちゃんみたいに……。

学校に着くと真っ先にノンちゃんとトーノがじゃれているところが目に入った。

ああ、やっぱりこうだ。

もう嫌だ。

どうして現実はこうもつまらないの？

もっと私にSweet Dreamいーどらむ見せてよ。

こうやって英語を使うのだって今すぐ外人になれたらと思うから。

二人の前から消えてしまいたいと願うから。

だけど私はどうあがいても純日本人で英語は単語の一部しか知らない。

頑張つて他国籍になろうとも思わない。

「優奈ちゃん……」

ノンちゃんの声を久々に聞いた気がする。

「何？」

「あきらめる……ね？私、遠野君のこと、あきらめるね？」
必死で考えたのだろう。

目の辺りに隈がある。

私が黙っているとノンちゃんはつぶけた。

「私ね、優奈ちゃんのこと、凄く、すごく大事な親友だから、失いたくないの。それに……遠野君と優奈ちゃんが共有してた時間が私はうらやましかった。だけどどんなに頑張つても二人の時間には入れないよね。」

どうしてそんな顔するの？ノンちゃんはいつもずるいよ。

潔白の主人公で、大抵誰にでも好かれて……それ以上何を

望むの？

どうして私から奪っていくの！

次の日、痛々しく笑うノンちゃんを私は見た。
でも私、もうノンちゃんの涙さえきかないよ。
もう元にはもどれないんだよ。

荒れ狂った獣はいずれ我を忘れる。

「お！野々原^{セツ}！」

「遠野君？」

ほらまた。私に気付かずにノンちゃんに声をかける。

「トーノ。」

「なんだ、優奈もいたのか？」

下の名前で呼ぶのは幼なじみの名残。

「野々原泣いてたのか？」

「え？何でもないよ？」

やめて………やめてよ………！

獣が暴れだして今すぐノンちゃんを引き裂いて食べと命じている。

「今日さ………放課後教室にいて。」

「え？あ、うん。」

「じゃあ私は一人で寂しく帰りますよーだ！」

そして放課後………ついていった。

トーノはノンちゃんにコクって両思いになった。

ううん。カップルになった。

ノンちゃんはうれしさのあまり泣いていた。

きれいだった。

涙も感情を曝け出せるノンちゃんも。

だから好きだったよ。

同時にだいつきらいだったよ。

失いたくなかったよ。

でもやりきれなかった。

だから私を一人にしてよ………。

「優奈ちゃん！」

できた傷をこれ以上膿ませる気はなかった。

「おめでと。ばいばい。」

「オッス！って待て待て！」

何？いい加減にして。

「知ってる？そういうのウザイ。」

「ひどい……。」

泣けばいいじゃない。トーノに慰めてもらいなさいよ。

「おまえそういう奴だったか？」

「ええ。」

「さいつていだな。」

「どっちが？」

「はあ？」

「……人の気持ちも知らないで……っ！土足で人の心の中に入ってくるのやめてよ！いい加減にして！あんた達から何も聞きたくない！」

早足すぎる。

二人は追ってこない。

それでいい。

私が手に入れられなかったものをポンポン手に入れていくノンちゃんににくい。

人の気持ちも知らないでずけずけものを言ってくるトーノが憎い。

「優奈ちゃん、お昼一緒に食べよう？」

「いいよ。邪魔になるし。」

「……わかってるよ？私は欲張りだよ。だけど優奈ちゃんのこと失いたくないの。」

ポロポロ泣きだした。

私はギョツとした。

「優奈……おまえ、また泣かせたのか！」

違う！濡れ衣だ！

「違うよ……私が悪いの。」

ノンちゃんがトーノを止める。

「違うよ。ノンちゃんとトーノが悪いんだよ。」

「はあ?」

「二人とも仲良くやってりやいいじゃん。私はあんた達が幸せそうにヘラヘラしてるのをいつまで見てなきやいけないの?私の前から消えて。消えろよ!」

ずっと言いたかった言葉……言い切ったら虚しくなった。

Sweet LoveどこにもないHappy Endもつとない。

恋って苦い。

唇を噛み締めることしかできない苦い苦い恋……。

(後書き)

幼馴染ってなんかいいですね。
私には幼馴染はいません……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0360i/>

苦恋-not sweet love-

2010年10月24日02時38分発行